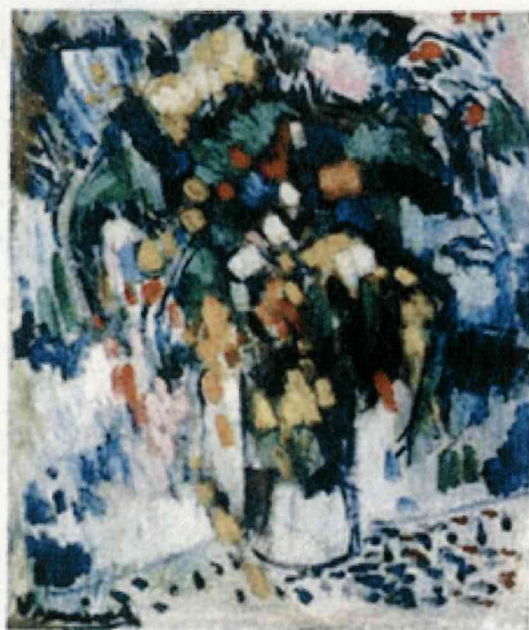


メナード美術館は改装を終え、新企画展「花」を開催している。花は、主役にするもよし、人物に添えるもまたよしで、これほど融通無碍な造形物はない。花はいつも身近にあって、本物の花を見たり飾ったりするのは簡単であるにもかかわらず、どの時代でも、またどの文化圏でも、人々は花の絵を描き、花の形を元にして装飾文様を作り続けてきた。まるで、自然が人間に対して「これに習っておまえたちも美を目指せ」と、果てしない課題を与えたかのように見える。

フランスの画家ウラマンクの「花瓶の花」(一九〇五-〇六年ごろ)は、この美術館

身近な自然美を追究

の新収蔵作品で、今回が初公開となる。花瓶に生けた花束を中心に大きく描いているが、花の形を描写するというよりはむしろ、これを見たときの作者の中にわき起こる気分や感覚を、思い切って自由に奔放にキャンパスにくり広げている。色彩が、画面の外にまで跳びはねてくるようだ。ウラマンクがこれを描いたのは、没してまもないゴッホに大いなる感銘を受けて、原色を大胆に使った画風を確立させるころである。同時に、そのダイナミックな画風が人々



モーリス・ド・ウラマンク「花瓶の花」メナード美術館初公開
コレクション©ADAGP, Paris
& JASPAR, Tokyo, 2016 C1267

を驚かせ、マティスらとともに「フォーヴィスム(野獣派)」という名で呼ばれるようになった、まさにその時期でもあった。

本展ではこの他に、花を主題としたシャガールやウォーホルなど欧米の作品、岸田劉生などの洋画、速水御舟などの日本画、そして河合寛次郎やエミール・ガレなどの花器を、全部で数十点集めている。これらの比較的小さな作品から、自然と取り組んで美を追究する人間のいとなみとはどういうものかという、大きな問いが広がっていく。

(浅野和生「愛知教育大教授」)

所蔵企画展「花」

追悼 小嶋悠司

▶ メナード美術館 ☎0568(75)5787 7月9日まで